



仏の声を聴く

現代は格差はあるとはいえ、物に恵まれ、医療、福祉も整い、寿命も延び、人間の本质である、老、病、死さえ回避できるかのような情報があふれ、大切な肉親との別れも、医療器具に囲まれた病院で迎えることがほとんどで、本来の臨終の姿に立ち会うことも少なくなりました。

しかし、世の中が進んで、ものの考え方や、見方が変わったことで、人間も変化し、成長し、個々の抱える問題が、以前より解決したのでしょうか。かえって、昔の人のように死や命というものを考えたり、人間とは何かを問う機会も失われ、「老、病、死」を忌み嫌い、敗北と捉えるようになってしまっているように感じます。

* * *

日本は多くの方が、高校や大学に学び、誰もが簡単に情報を得る手段も増えて、知識が豊かになったかのようなのですが、人間の本质や本能の部分まで進化したとはいえません。知識に頼る現代において、かえって生命に対して傲慢になっていることは、環境がどのように進歩しても、人間は変わらぬ本質を持っていることを見忘れさせていることを現しています。

それは、私たちをとりまく最近のものの考え方にも現れ、役に立つか立たないか、勝つか負けるか

能力があるかないか、など単純に二者択一され、価値を失ったものは、捨てていくというのが主流を占めてしまっています。

* * *

仏教のものの見方は、このような見解とは異なり、あらゆる生きとし生けるものの命を認めていくことから始まって、すべての存在を必要とし、すべての命はそれらお互いの支えの中に生かされていると説きます。自分を生かすことは、他を生かし、すべてのものと共に生かされる道を明らかにして、私たちに気づかせてくれる教えです。

仏の声（教え）にふれるとき、私を生かすために、あらゆる手立てがなされ、あらゆる生命との関わりの中で、この私が生かされていることを知らしめてくれ、これらあらゆるものを大切に生きていくことが、私を生かす道であり、言い尽くされた言葉ですが、「私一人で生きているのではない」ことを徹底して教えています。しかし、私たちの日常は現実的な日暮しに追われ、聞いていながら聞こえていないことが多いのです。

* * *

そんな私たちの「聞く」ご縁となるのが、先人が守り伝えて下さった多くの仏事、仏縁です。仏となられた方々は、私たちのいのちが、生きるという始めをもつとともに、また死ぬという

終わりをもつ「いのち」であり死ぬべき身として、今生かされていることを、その身をもって教えて下さる尊いご縁を結んで下さっているのです。

亡き人に、故人ではなく「仏」として向かうとき、この世に生命を賜った意味が、いよいよ知らされます。その仏の声も、若い頃のものの見方、年取ってからのそれとは違います。

世間ではものと心を対立させて考えますが、仏教は、ものを包み覆う心、あらゆるものを大切に生かす教えです。だからこそ、仏法は若い時から聞けといい、老若男女、家族揃ってお参りすることを大切にしてきたのです。

仏教の「聞く」は、単に耳で聞くのでも、頭で理解するのでもない、からだ全体、いのちで聞くといいでしょう。

私たちが、仏となられた方々の大慈悲の願いを、自分のいのちにおいて聞きとることによって、お互いが浄土往生の歩みを重ねる身だったことが知らされ、気づかされます。そして、ただ「おかげさまで、ありがとうございます」と応えて従うのみの私の「苦悩を抱えたそのまま」が、成長（成熟）するということだったのだと深い喜びが知らされることでしょう。お盆です。仏縁を大切にお勤め下さい。合掌

奏庵法座
お盆のお参り

日時
7月26日(火)
午前11時より

「真宗宗歌」
阿弥陀経
法話
ご文章拝読
「恩徳讃」
～*～
おとぎ

今年も後半に入りお盆を迎えます。宗教心の薄れゆく中で、本来の意義とは遠いものにはなっていますが、お盆という夏を象徴する行事は日本人にしっかり根付いています。亡くなられた方々が仏となって、普段は宗教から程遠い日常を送っている家族を集め、仏に向かわせるという大仕事をされることを感じます

急に暑さが増してきました。体調に合わせて、どうぞゆっくりとお参り下さい。

暑中お見舞い
申し上げます



お知らせ

お盆のお参りを受け付けています。お参りは、地区ごとに分けて同じ日にお参りさせていただけるよう予定を組んでいますので、早めにご連絡いただければありがたいかと存じます。

特に初盆などで時間を指定なさりたい場合は、できるだけ早いご連絡をお願い致します。

また、奏庵でのお参りは、お盆期間中はいつでもお参りいただけますが、その際に読経をご希望される方は事前にお電話にてお申し出下さい。お参りがお盆期間外になるときも事前にお電話の上お参り下さい。

例年の通り8月は、「奏庵法座」「かなであん便り」はお休みさせていただきますが、法事などの仏事は変わらずお参りいしていただけますので、どうぞいつでもご連絡下さい。

下半期は、お彼岸と永代経法要から始まります。

皆様には、暑さ厳しき折柄、どうぞお大切に自愛下さい。

この身これ
尊くあるか否あらず
ぬかずく人を
尊しと思う
九条武子

日々伝えられる頻発するテロ、イギリスのEU離脱騒動、そしてクーデターと。国の体制を揺るがすという意味では、天皇の「生前退位」も含まれるだろうか…。異なった文化背景にあるものを同じモラルで縛ることの限界がきていて、世界中が行き詰まってきているのを感じる。■グローバル化、正義、道徳、国際法、国民投票という言葉を受ければ、近代的で民主主義的で、正しいことのように聞こえてしまうが、単純に「白か黒か」の判断には、無理があることを知らされる。ましてそこに利権が絡めば、一つの価値観、一つの世界で縛ることは不可能だ。■中国はお隣だが価値観は日本とは真逆だ。その何千年という長い歴史も、一貫して、強く、大きく、あることを価値基準においてきた民族だ。それが自分たちが一番、世界の中心だという中華思想であり、そこでは世界の常識など二の次なのだ。■一方我が国は、表面的には、成金を蔑み、威張ったり、札束をチラつかせたりすることを恥とし、謙虚で奥ゆかしく、侘び寂びを好み、他を慮り、他の目、他の出方を見ることを「よし」としてきた。そんな民族には有り余る経済は似合わず扱いかねるものだったのかもしれない。■いつか聞いた「2位ではダメなんではしょうか」の言葉、言い放った女性議員は好きではないが、この言葉にはインパクトがあった。バブル時代にアメリカの経済学者が書いた「ジャパン アズ ナンバーワン」が、日本人の自尊心を大いにくすぐったが、それは、日本人の足元を浮足立たせ、真実を見失わせるものだったのかもしれない。■敗戦後の日本が世界から問題にもされていなかった時代、一般庶民は外国のことも知らず、人は精一杯働き、子育てをし、その中でも楽しく感じることはいっぱいあった。あの頃と同じ幸福感を今は味わうことがない。そこには「貧」しても「鈍」しないで生きようとした日本人の踏ん張りがあった。「貧」して「鈍」するのは経済ばかりではない。今、日本が貧して鈍しているのは「心」なのではないだろうか。 Norimaru